班女

觀世流改訂謡本 内一

四番目
略三番

班女（ハンヂヨ）

七月

シテ　花子
ワキ　吉田少将
ワキヅレ　従者
狂言　宿の長

狂言△「是は美濃の國野上の宿の長にて候。爰にも我花子と申て上臈を持ちまゐらせて候が。過ぎにし春の頃都より。吉田の少將殿とやらん申す人の東へ御下り候が。此宿に御とまり候ひて。彼の花子に深き御契のさふらひけるが。扇を

取り替へて御下り候ひしより。花子扇に
ながめのみ閨より外に出づる事なく候
程に。彼の人を呼び出し追ひ出さばやと
思ひ候。いかに花子。今日よりしてこれには
かなひ候まじ。とくとく何方へも御出で候へ▽

シテ 中

ヨワク げにや本（モト）よりも定（サダメ）なき世といひながら。
うきふししげき河竹の。流れの身とこそ

悲しけれ 下歌地〽分け迷ふ行くも
知らでぬれ衣 上歌 野辺の里を立ち
出でし。野辺の里を立ち出でし。
近江路なれで憂き人よ。別れし
よりの袖の露其まゝ消えぬ身ぞ
つらき。其まゝ消えぬ身ぞつらき 中入
ワキ ワキツレ 次第上 ツヨク〽帰るぞ名残富士の嶺の。帰るぞ名残

富士の嶺のゆきて都よ語らん

ワキ詞 これハ吉田の少将とハ我が事なり。偖も
われ過ぎにし春の頃東に下り。はや
秋にもなりゆくぞ。唯今都に上り候

ワキ ワキツレ 道行上 都をば霞と共に立ち出でゝ霞と共に
立ち出でゝ。春ぞしほどもふる秋風の。音
白河の関路より。又立ちかへる旅衣。浦山

過ぎて美濃の國。野上の里に著きにけり
野上の里につきにけり　いかに誰かある。
急ぎ向これは美濃の國野上の宿
まで參りて候。此處に花子と云ひし女に契りし
事あり。未だ此處にあるか尋ねて來りて候
畏つて候。花子の事を尋ね申してくれ候へ。
長と不和なる事のありて。今は此處にはなく

御のりなき由申候。ワキ「偖ゝ定なき事ながら。もし其花子帰り来る事あらば。都へついでの時ハ申上候へと固く申しつけ候へ」。急ぐ間程なく都につきて候。われ宿願の子細あれバ。これより直に糺へ参らばやと存候。皆ゝ参り候へ

後シテ上 一声 ヨワク サラリ
「春日野の雪間を分けて生ひ出づる。

草のはつかに見えし君かも。よしなき
人に馴れ衣の。日を重ね月ハ中けれども。
せを秋風の便ならでハ。中かりを知ら
まる人もなし。夕暮の雲の旗手に物を
おもひ。うはの空にあくがれ出づ。身を
いたづらになす事を。神や佛も憐
みて。思ふ事をかなへ給へ。それ是柄

箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。

夫婦男女のかたらひを。守らんと誓ひ

おはします。此神ごよ祈誓せば。などか

験のなかるべき謹上。再拝　戀すてふ。

我がなはまだきたちにけり　人知れず

こそ。思ひそめし　あら恨めしの

ひとごゝろや　げにや祈りつゝ手洗

ばよ戀せずて。誰かいひけん空言や。
されぞ人心。誠すくなき濁江の。そこまで
頼まば神とても。うけ給はぬことわりや。
とにもかくにも人知れぬ。思の露の

下歌 地 置所いづくならまし身の行くへ

上歌 心だに。誠の道にかなひなば。誠の道に
かなひなば。祈らずとても。神や守らん

われらまで。眞如の月ハ曇らじと。
知らで程へし人心。衣の玉ハありながら。
恨ありやともまれぞ猶同じ世を祈る
なり猶同じ世を祈るなり。

ワキツレ詞
いかに狂女。
何とてけふハ狂はぬぞ面白う狂ひ候へ

シテ
「うたてやなあれ御覧ぜよ今までハ。
搖がぬ梢と見えつれども。風の誘へバ一

葉も散るあり。たま〳〵心すぐなるぞ。
狂へと仰ある人こそ。風狂じたる秋の
葉の心もともよ乱れ恋の。あら悲しや
狂へとの仰ありさむらひぞよ　ワキツレ詞〽さて
例の班女の扇とは　シテ〽うつゝなや我が名を
班女と呼び給ふぞや。よし〳〵それも
憂き人の。かたみの扇手にふれて。うち

おき難き袖の露。なる事までも思ひぞ出づる。班女が閨のうちならん秋の扇の色。楚王の臺の上ならん夜の琴の聲

地 夏はつる。扇と秋の白露と。いづれか先に起臥のとこ。すさまじや獨寝の。さびしき枕して閨の月をながめん。

月重山に隱れぬれば。扇を擧げて

地「これをと喩へ 花蕊上よ散りぬれば

「雪を聚めて。春を惜む ・夕べの嵐

朝の雲。いづれか思のつまならぬ

地「寂しき夜の鐘の音。鶏籠の山よ

響きつゝ明けなんとして別れを催し

シテ「せめて閨もる月だも 地「去ぞら枕よ

残らずして。又獨寝となりぬるぞや

クセ
翠帳紅閨に。枕ならぶる床の上。馴れし衾の夜すがらも同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の命のみかぎりあるこそ。いつまで草の露の間も。比翼連理のかたらひも。その驪山宮の私語も。誰か聞き傳へて今の世まで漏らすらん。

●さるにても我が夫の。秋より前にかならず

ぎて。夕べの數は重なれど。あだし言葉の
人心。たのめて來ぬ夜はつもれども。
欄干に立ちつくして。そなたの空よと
ながむれば。夕暮の秋風嵐山風
野分も木の松をこそは音づるれ。我が
待つ人よりの音づれをいつ聞かまし
せめてもの。かたみの扇手にふれて

地

風のたよりと思へども。夏もはや杉の
窓の。秋風ひやゝかに吹き落ちて
團雪の。扇も雪なれば。名を聞くもすさま
じくて秋風恨ありよしや思へばこれも
げに逢ふは別なるべし。其報なれば
今さら。世をも人をも恨むまじ唯思は
れぬ身の程を。思ひつゞけて獨居の。

●獨吟 仕舞 中ノ舞●

班女が閨ぞさみしき。繪にかける

シテワカ上 月をかくして懐に。持ちたる扇

地上 とる袖も三重がさねの。其色衣の

地上 つまのかねごとの。かならずと夕暮の。月

も重なり 地 秋風は吹けども。荻の葉の

シテ のそよとの便も聞かで 地上 鹿の音

虫の音も。かれがれの契ならずや

シテ「かたみの扇より。地「かたみの扇より。猶裏表あるものは人心なりけるぞや。あふぎとは空言や逢はでぞ戀は添ふものを逢はでぞ戀は添ふものを。

ワキ「いかに誰かある。あの狂女が持ちたる扇見たきよし申し候へ。トモ「いかに狂女。あのお輿の内より。狂女の持ちたる

扇は御覧じたきまでの御事にてもまゐらせられ候へ
シテ「これは人の形見なれば。
身をも離さで持ちたる扇なれども。
形見こそ今は仇なれこれなくは。
忘るる隙もあらましものをと。思へ
どもさすがに又。添ふこゝちまさるなうくれ。
扇なるまも惜しきものを人よ見えてる

事あらじ
ロンギ地上 〽こなたにも。忘れがたみの
言の葉を。磐手の森の下躑躅。色よ
出でずはそれぞとも。見てこそ知らめ
此扇 シテ上 〽見ては猶。何のためぞと夕暮の。
月を出せる扇の繪の。かくばかり向ひ
給ふは何のお爲なるらん 地上 〽何ともよし
や白露の。草の野ごとの旅寝せし

契の秋はいらならん シテ「野上とは。野上とは東路の。末の松山。浪こそ帰らざりし人やらん 地上「末の松山たゞ波の。何か恨みん契りおく シテ「かたみの扇 そなたよも 地「身よ添へ持ちこの扇 シテ「閨の内より 地「取り出せば。あとりか たそかれは。ほのぼの見れば夕顔の。

花など書きたる扇なり。此よい惟光よ
紙燭召して。ありつる扇ご覧ぜよ
見よ。それぞと知られ白雲の扇の妻の
あたみこそ妹背のなかの情なれ
妹背のなかの情なれ・

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠

始めたる年月日 大正　年　月　日

終りたる年月日 大正　年　月　日

稽古

感想

使用家の特權

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買入揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せられれば、裝り方は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

著作權所有

大正六年五月三日印刷
大正六年五月七日發行

一番綴 稽古本

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金属版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會

田村
観世流改訂謡本
内一

二番目　田村（タムラ）　三月

シテ　田村丸（前ハ童子）
ワキ　僧

ワキ次第上（三人）
都の都路隔てて來て。都の都路隔てて來て九重の春よ急がん

ワキ詞
これは東國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。此春思ひ立ちて候

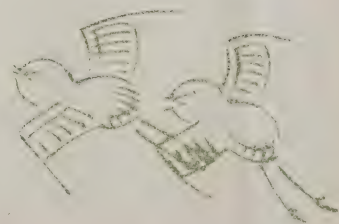
道行上（三人）
頃もはや。弥生なかばの春の空。弥生なかばの春の空。影も長閑にめぐる日の

霞む其方や音羽山。瀧の響も静
まる。清水寺に著きにけり清水寺に
つきにけり　急ぎ候程に。これハ都
清水寺とかや申まそげに候。これなる櫻の
盛と見えて候。人を待ちて委しく尋ね
ばやと思ひ候　おのづから。春の手向と
ありけり。地主権現の。花ざかり

サシ上 それ花の名所多しといへども。大悲の光色添ふ故か。此寺の地主の櫻に志くはなし。されば大慈大悲の春の花。十悪の里に芳しく。三十三身の秋の月。五濁の水に影清し

下歌 千早ぶる神のお庭の雪なれや

上歌 白妙に。雲も霞もうづもれて。雲も

●小謡●

霞もうづもれて。何れ櫻の梢ぞと。見渡せばや八重一重。げに九重の春の空。四方の山なみおのづから。時ぞと見ゆる氣色かな時ぞと見ゆる氣色かな。

ワキ詞「いかにこれなる人に尋ね申すべき事の候

シテ「此方の事にて候。何事にて候ぞ

ワキ「見申せばうつくしき玉箒を

持ち。木陰(コカゲ)を清め給ひ候ハ。もし花守(ハナモリ)にて御入(ニ)候か「シテ　さん候これハ此地主

権現(ゴンゲン)に仕へ申す者なり。いつも花の頃ハ木陰(コカゲ)を清め候程に。花守(ハナモリ)とや申さん。

又宮奴(ミヤツコ)とや申すべき。いづれにも由(ヨシ)ある者と御覧候へ「ワキ　げにげに由(ヨシ)ありげに見えて候。まづまづ當寺(トオジ)の御来歴(ライレキ)委(クワ)

シテ語

しく語り給ふべし。そも〳〵當寺
清水寺と申すハ。大同二年の御草創。
坂上の田村丸の御願なり。昔大和の國
子嶋寺と云ふ所に。賢心といへる沙門。
生身の觀世音を拜まんと誓ひしに。
ある時木津川の川上より。金色の光
さしゝかバ。尋ね上つて見れバ一人の老翁

あり。彼の翁語つていはく。われは
これ行叡居士といへり。汝一人の檀那を
待ち。大伽藍を建立すべしとて。東を
さして飛び去りぬ。されば行叡居士と
いふぞ。これ観音薩埵の再誕。また
檀那を待てとありしハ。これ坂上の
田村丸。今もその。名は流れたる

清水の。名に流れたる清水の。深き誓も
數に千手の。ち手のそうぐ攝ぐの
誓普くて。國土萬民をもらさじの。
大悲の影ぞありがたき。げにや安樂
世界より。今此娑婆に示現して。
われらが爲の觀世音あふぐも愚
かるべしやあふぐも愚かるべしや。

ワキ「近頃面白き人に參り逢ひて候ものかな。又見え渡りたるハ皆名所にてぞ候らん御教へ候へ　シテ「さん候皆名所にて候。御尋ね候へ教へ申し候べし　ワキ「まづ南に當つて塔婆の見えて候ハいかなる所にて候ぞ　シテ「あれこそ歌の中山清閑寺。今熊野まで見えて候　ワキ「また北に

當つて入相の聞ゆるは。いかなる御寺にてあるぞ

シテ「あれは上見ぬ鷲の尾の寺。や。御覧候へ音羽の山の嶺よりも。出でたる月のかゝやきて。此地主の櫻に映る氣色。まづ／＼これこそ御覧じ事なれ

ワキカヽル上「げに／＼これこそ暇惜しけれ。ことに心ある春の一時

シテ「げに惜むべし ワキ「惜むべしや。春宵一刻値千金。花に清香。月にかげ

シテ「げに千金にも。代へじとぞ。今此時や

地「おもしろの地主の花の氣色やな。櫻の木の間にもる月の雪もふる夜嵐の。誘ふ花とつれて散るや心なるらん

クセ「さぞな名におふ。花の

●獨吟クセ留メデ●

●仕舞

都の春の空。げに時めける粧ひ青楊
の影みどりにて。風長閑なる。音羽の
瀧の白糸のくり返しかへしても
面白やありがたや。地主権現の花の
色もことなり　唯頼め。標茅が原
のさしも草　われ世の中にあらん
かぎりはの誓願。濁らじものを清

水の。緑もさそや青柳の。げにも枯れたる木なりとも。花櫻木のよそほひ。いづくの春も。おしなべて。長閑き影は有明の。天も花に醉へりや。面白の春べや。あらおもしろの春べや。・げにや氣色を見るからに。唯人ならぬ粧ひの其名いかなる人やらん。いかさまも。

いざや其名も白雪の跡を惜まば此
寺に帰る方を御覧ぜよ　帰るや
いづくあしがきの。まぢかきほどか
遠近の　たづきも知らぬ山中に
おぼつかなくも。思ひ給はゞ我がゆく
方を見よやとて。地主権現の御前
より。ゆるかと見えつゝ。くだりはせで

坂の上の田村堂の軒もる月の

むら戸を押しあけて内へいらせ給ひ

けり内陣へいらせ給ひけり• 中入

ワキ上歌（三人）待謡

夜もすがら。散るや櫻の陰に居て。

散るや櫻の陰に居て。花も妙なる法

の場。迷はぬ月の夜と共に。此御經を

讀誦する此御經を讀誦する

後シテ上 一声「あらありがたの御経やな。清水寺の瀧つ浪。まことに一河の流を汲んで。他生の縁ある旅人に。言葉をかはすまそ夜聲の讀誦。これぞまさしく大慈大悲の。観音擁護の。結縁たり

ワキカヽル上「ふしぎやな花の光にかゞやきて。男體の人の見え給ふは。いかなる人にて

ましまさで今ハ何をかつゝむべき。人皇五十一代。平城天皇の御宇よありし。坂上の田村丸東夷を平らげ悪魔を鎮め。天下泰平の忠勤たりしも。即ち當寺の佛力なり

●獨吟クセ留マデ

●サシ上 然るよ君の宣旨よて。勢州鈴鹿の悪魔を鎮め。都鄙安全よなすべしとの。

御よつて軍兵を調へ。まてよ赴く
時節よ至りて。此観音の佛前よ参り。
祈念をいたし立願せしよ。ふしぎの
瑞験あらたなれば。歓喜微笑の頼
をふくんで。急ぎ凶徒よ打つ立ちけり

クセ
普天の下。率土の中いづくよ地よあら
ざるや。やがて名よしおふ。関の戸さゝで

●獨吟之ヨリ切マデモ

逢坂の。山を越ゆれバ。浦波の。粟津の
森やかげろふの。石山寺を。ふし拝(ヲガ)
み。これも清水の。一佛(イチブツ)と。頼いあひよ
近江路や。勢田の長橋。ふみならし。駒
も足並(アシナミ)や。勇(イサ)むらん。既よ伊勢路の
山近く。弓馬(キウバ)の道も。さきかけんと。
かつ色みせたる梅が枝の。花も紅葉(モミヂ)

も色めきて。猛き心にあらがねの。
土も木も我が大君の神國よ。もとより
觀音の御誓佛力といひ神力もおほ
數〻よまきてらちとぞ。待つとは知らできさと
鹿の。鈴鹿のみそぎせし世〻までも。思
へば佳例なるべし。さる程に山河を
動かす鬼神の聲。天に響き地に滿

●獨吟

●仕舞

ちて。満目青山動揺せり。いかに鬼神もたしかに聞け。昔もさるためしあり。千方といひし逆臣に仕へし鬼も。王意を背く天罰にて。千方をすつれば忽ち亡びうせしぞかし。ましてやまぢかき鈴鹿山。ふりさけ見ればカヽル上伊勢の海。地上ふりさけ見れば伊勢の海。

安濃の松原むらだち来つて。鬼神は。黒雲鐵火をふらしつゝ。數千騎に身を變じて山のごとくに見えたる所に　あれを見よふしぎやな　あれを見よふしぎやな。身方の軍兵の旗の上に。千手觀音の光を放つて虚空に飛行し。千の御手毎に。大悲の弓に。

智慧の矢をはめて。一度放せバ千の
矢さき。雨霰とふりかゝつて。鬼神の
上に。乱れ落つれバ。ことごとく矢先に
かゝつて鬼神ハ残らず討たれにけり。
ありがたしありがたしや眞に呪詛。
諸毒藥念彼。観音の力を合せてすなはち
すなはち還著於本人すなはち還著於

本人の。敵ハろびよけりとれ。観音の。
佛力あり。

文學博士　井上頼圀　本文監修
丸岡桂　本文訂正
観世清之　節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

使用家の特權

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せられなば、發行所は無料にて五番綴の美本に仕立直し返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正六年十一月廿日印刷
大正六年十一月廿五日發行

大正本一番綴

發行者　東京市神田區今川小路三丁目九番地　土居源太郎
印刷者　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條愷
印刷所　東京市神田區佐久間町一丁目一番地　七條式金属版印刷所

發行所　東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行會